

研究部ニュース 2024年度第3号

2025年2月28日（金）

発行者：研究部

平素は本校の教育及び研究活動にご協力いただきありがとうございます。1月から始まった3学期も残り少なくなってきました。研究活動も順調に進めてきました。

研究大会（3年次）について

全校研究主題を「知的障害特別支援学校における教育課程の編成と評価の一体化」とし、令和7年2月8日に研究大会（3年次）を実施しました。全国から100名を超える先生方に参加していただきました。本校からの基調提案に対する指導助言を本学特別支援教育部門の今枝史雄先生からいただき、研究大会の最後は、文部科学省 初等中等教育局 特別支援教育課 特別支援教育調査官 加藤宏昭先生から「子供たちの資質・能力を育成する指導と評価の考え方」と題するご講演を賜りました。大会後のアンケートでは、感想や質問を多数いただき、次年度につながる大会となりました。



研究大会当日の様子

ユニット研究について

本校教員と大学教員との連携研究である12の「ユニット研究」は、特別支援教育の今日的課題に対応した内容の授業実践・実験研究などを網羅して取り組みを行っています。今年度実施されたユニット研究の内容を紹介します。

1 特別支援学校のシラバスの検討—教務課を担当する教員を対象としたアンケート調査の結果—

◎松本 宜明・岩崎 弘・金 憲央・花田 知恵

【共同研究者 今枝 史雄（大阪教育大学 特別支援教育部門）】

【研究目的】

令和5年度に作成したアンケート用紙を用いて、大阪府立の支援学校が運用しているシラバスの学校現場への影響を検討する。

【考察】

1. 授業の質向上の一助となる可能性について⇒授業の質は充実したシラバスが支えている可能性が高い授業の質は一朝一夕に向上できるものではなく、先輩教員の存在や粘り強い取り組みなど、様々な要素が必要である（田村、2021）。また、門倉・有泉・大嶋（2024）は、良い授業計画は充実したシラバスに支えられていることを述べている。
2. シラバス改訂と教員理解の関係について⇒シラバスに関する校内研修等の充実が、シラバスのより良い改訂につながる。シラバスに関係する教員同士で深く議論されることなく改訂されているケースがある可能性を示している。小倉・澤田・立田（2024）は、「校内組織や研修体制整備が、特別支援学校におけるカリキュラム・マネジメントを機能させる」としている。
3. シラバス作成の際、考慮する必要がある事について⇒児童生徒の実態と学校の実態の両方を参考にする必要がある。文部科学省のホームページやこれまでの先行研究においても、特別支援学校のシラバスに関する資料は見当たらない（松本他、2024）つまり、今回のアンケート調査の結果は、シラバス作成の際、考慮する必要がある事に関して1つの結論を出した内容であると言える。

2 学校における体罰に関する研究—攻撃性の観点から—

◎大河 竜介・小川 香織・鹿田 紀子・森 久美子

【共同研究者 西山 健（大阪教育大学 特別支援教育部門）】

本研究は、学校における体罰という事象を人間の攻撃性の観点から考察することを通して、体罰の予防・防止に向けて効果的な方策を検討することを目的とした。人間の攻撃性に関する文献の講読および議論を行った結果、攻撃性が必ずしも否定的なものではなく、自己防衛や建設的な力としても機能し得ることなどが示された。また、欲求5段階説（Maslow,1943）など、人間現象に関する様々な理論や観点から攻撃性を捉えることにより、人間の攻撃性や体罰に対する多角的な理解が可能となることが示唆された。

3 知的障害特別支援学校における情報活用能力育成のためのモデル開発—IE-Schoolによる「情報活用能力の体系表例」を踏まえた授業実践から—

◎小川 香織・岩崎 弘・大河 竜介・野崎 善之・深草 武志・

本多 克敏・矢倉 晴子

【共同研究者 陸奥田 維彦（大阪教育大学 総合教育係）】

【研究目的】

知的障害特別支援学校において情報活用能力を育成するための育成モデル開発に必要な要素を明らかにする。

【考察】

対象校の実態では、IE-School の情報活用能力の体系表例の各ステップの幅が広すぎるがみえてきた。知的障害特別支援学校における情報活用能力育成については、児童生徒の実態に即したより具体的で丁寧な「知識及び技能」の育成を「積み重ねる」必要があり、その基盤から、「思考力、判断力、表現力等」を育成していくことが大切であるだろう。情報活用能力育成のためのモデル開発では、情報活用能力を育成するための具体的な生活場面を想定し、児童生徒の実態に即し、一人ひとりが主体的に学習に取り組むことができるテーマや活動の場面を設定することで、具体的な育成イメージを明確に示すことが求められる。今後の研究ではこうしたモデル例をさらに検討し実践研究を進めていきたい。

4 知的障害特別支援学校における野球動作が苦手な子どもに対するアプローチ方法の一考察—手足の協調動作の向上を目指した教育実践—

◎金 憲央

【共同研究者 大内田 裕（大阪教育大学 特別支援教育部門）】

知的障害特別支援学校に在籍する子どもたちは、運動に対する「不器用さ」や「ぎこちなさ」があることが知られている。このことについては、発達性協調運動障害（Developmental Coordination Disorder; DCD）の様相が明らかに見られる（大原ら,2022）。「障害者スポーツ推進プロジェクト（障害児・者のスポーツライフに関する調査研究）」（スポーツ庁,2024）によると、スポーツ非実施者がスポーツを実施しない理由として、「運動・スポーツが嫌いである」が最も割合が高いとされている。本校高等部の一部の生徒は昼休みに運動場で球技に取り組むことが日課となっており特に野球を好んで取り組む生徒が多く見られるが、ボールがバットに当たらない、キャッチボールがうまくできない等、思うように野球を楽しめない姿が見られることが現状としてある。そこで本研究では、運動に対する野球のバッティング動作に着目し動作改善のためのアプローチ方法を検討する。

5 公立小学校における支援を必要とする児童の保護者の情報ニーズ調査研究

◎野崎 善之・深草 武志

【共同研究者 早野 眞美（大阪教育大学 特別支援教育部門）】

【研究目的】

特別支援学級の在籍者及び通級指導教室に通う児童生徒数はいずれも増加し続けており、通常の学級における特別支援教育の充実喫緊の課題である。そんな中、地域における特別支援学校のセンター的機能に対する期待と責任が高まっている。

本研究では、公立小学校で特別支援学級に在籍している児童の保護者（特別支援教室群）及び通級による指導を受けている児童の保護者（通級群）が子どもの障害についてどのような情報を求めているか、またそれらの情報をどのような形で受け取ることを望んでいるかについて明らかにすると共に、効果的な情報提供の内容と手段を検討することを目的とする。

6 知的障害児における適切な学習姿勢とは—姿勢の違いによるタイピング文字数の変化を通して—

◎本多 克敏・深草 武志・野崎 善之

【共同研究者 大内田 裕（大阪教育大学 特別支援教育部門）】

【研究目的】
姿勢がタイピングのパフォーマンスに与える影響を測定する。

【考察】
・学習姿勢によって課題を遂行する力に違いがあり、学習活動を適切な姿勢で取り組む必要があると考えられる。知的障害児は身体発達に遅れがみられる場合が多く、姿勢保持の面で影響していることが考えられる。
・学習環境の設定については、学習課題を遂行する上で障壁となるような要因を取り除くことで、高いパフォーマンスを示す可能性が高いことが考えられる。

7 知的障害特別支援学校美術科における対話型鑑賞の実践的研究

—深い学びにつながる授業モデルの検討—

◎花田 知恵・保田 洋幸

【共同研究者 今枝 史雄（大阪教育大学 特別支援教育部門）

吉原 和音（京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センター）】

【研究目的】
知的障害特別支援学校における「主体的・対話的で深い学び」に基づく鑑賞の授業モデルの検討。

【考察】
①対話型鑑賞が生徒同士や教師との対話を促進し、生徒全員が鑑賞作品について発言するようになった。
②生徒の発言数が多いほど、深い学びの発言も増加する傾向が見られ、発言を促す環境作りが深い学びに繋がることがわかった。
③深い学びの発言が特定の生徒に偏る傾向があった。
→対話型鑑賞の授業モデルにおいて、発言を促す環境作りや、生徒以外の関与者の適切な配置が重要であることが示唆される。

8 特別支援学校における「学び合いの場」の実践—コーディネーターの役割に焦点をあてて—

◎松本 宜明・岩橋 鈴奈・河村 真司・金 憲央・小森 友紀恵・

迫田 真喜・土口 真奈・古川 菜稚・本多 克敏・森 久美子

【共同研究者 家近 早苗（東京福祉大学）

餅木 哲郎（堺市教育センター 能力開発課専門指導員）】

【研究目的】
本校の高等部と中学部が協力して行う「学び合いの場」の校内教員への影響とコーディネーターの役割について検討する。

【考察】
1. 新しくチームに入った教員が新しい視点で意見をすることは、お互いを援助し合うことにつながる。
2. コーディネーターが「相互コンサルテーション」を促進させることで、参加者は「援助者としての成長感」を感じられるようになる。
3. コーディネーターは、参加者が自由に意見を言い合えるように場をコントロールする役割がある。

9 知的障害特別支援学校高等部における卒業後を見据えた学びについてⅢ

—卒業生への生活状況調査を通じて得られた結果からの考察—

◎迫田 真喜

【共同研究者 今枝 史雄（大阪教育大学 特別支援教育部門）】

【研究目的】

○知的障害特別支援学校の高等部段階では、進路選択は重要なファクターとなる。

○進路指導・支援やキャリア教育に関する研究は、一人ひとりの社会的、職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促すというキャリア教育的観点によるものや、学校組織における進路指導部を中心とした構造的な在り方の分析を扱った研究は多く見られる。

→高等部卒業生を対象に卒業後を踏まえて高等部時に必要だった学びについて検討した研究は多くは見られない。高等部卒業生への生活状況調査を実施することで、現在の困難さ等の実態を明らかにし、高等部の教育課程に反映することが今後必要であると言える。

○本研究では、高等部卒業生への生活状況調査を通して、知的障害特別支援学校高等部における卒業後を見据えた学びを検討することを目的とする。

10 特別支援学校教員が授業内で行う発達支持的生徒指導

◎河村 真司

【共同研究者 水野 治久（大阪教育大学 総合教育係）】

生徒指導提要（2022）では、生徒指導は学校の教育目標を達成するうえで重要な機能を果たすものであり、学習指導と並んで学校教育において重要な意義を持つものである。その中でも、発達支持的生徒指導は特定の課題を意識することなく、すべての児童生徒を対象に学校の教育目標の実現に向けて、教育課程内外の全ての教育活動において進められる生徒指導の基盤になるものであるとされている。そこで、本研究の目的を附属特別支援学校において教員が授業で生徒に対してどのような発達支持的生徒指導を実際に行っているのかを明らかにすることとする。

11 知的障害特別支援学校における「さわる」を取り入れた美術鑑賞の実践的研究

◎保田 洋幸・花田 知恵・上西 大輔

【共同研究者 正井 隆晶（大阪教育大学 特別支援教育部門）】

【目的】

「主体的に学習に取り組む態度」を養う美術鑑賞の学習モデルを視覚障害教育での「触察（以下、さわる）」の手法を取り入れて検討する

【考察】

・結果1と昨年度の結果も踏まえて、知的障害特別支援学校中学部段階での鑑賞学習の評価は、鑑賞ルーブリックの3観点のレベル1～3の範囲で当てはまり、その多くが1または2のレベルで評価に悩むことが分かった。このことから、知的障害教育に適した内容でレベル分けすることや、より明確な評価規準を設けることも必要と考えられる。

・結果2より、触図への興味関心の高さを見ることができたが、触図により創造性が高まったのか等を実証するまでには至っていない。

・全体を通して、模写等の表現活動での結果が、鑑賞ルーブリックでの評価や、「さわる」美術鑑賞の定義に当てはめることができたことから、知的障害教育における鑑賞ルーブリックの評価規準の指標に関しては、表現活動での要素も含めて検討することが妥当であると考ええる。

12 リラックス効果のある音楽について—唾液アミラーゼ測定値による検証—

◎小森 友紀恵・加藤 道子

【共同研究者 湯浅 哲也（大阪教育大学 特別支援教育部門）】

一般的に音楽を聴くことで、心理・生理に影響を与え感情や行動をコントロールする効果があるといわれている。それらのことは知的障がい児に対しても「音楽療法」をはじめとした音楽を通してのリラックス効果を引き出すことで、心身やQOLの向上に役立っている。そこで、本研究では、知的障がいのある中学部・高等部生徒を対象に、リラックス効果があるといわれている楽曲を聴き、生理的指標を用い、客観性に基づいた唾液アミラーゼ測定による検証・実験的研究を行う。